

80歳記念

中山道 日帰り旅記録



東京都文京区～長野県奈良井宿

2024年 今井 晴彦



板橋(溪斎英泉)



高崎(歌川広重)



坂本(溪斎英泉)

【私にとっての中山道】

いつのまにか、年齢が80ということになってしまった。あまり自覚症状が無いのもまずいかと、それを記念して中山道を歩くことにした。生まれたのは1944年(昭和19年)で、日本はまだ第2次世界大戦のさなか、空襲を避けるため母は軽井沢の母の祖母の別荘に疎開したことから、そこで生まれることになった。なお生まれた所は沓掛という宿で、それが今は中軽井沢になっている。戦後になり東京に戻ったのだが、千駄ヶ谷の家は全焼しており、焼け残った家を借りたりしたが、5歳の頃に焼けなかった(母方)祖母の文京区西片町の家に移り込んだ。家の一番広いところは接收され進駐軍の将校夫婦が住んでいたものの、残ったところに祖母の子供家族が入り込んだのである。

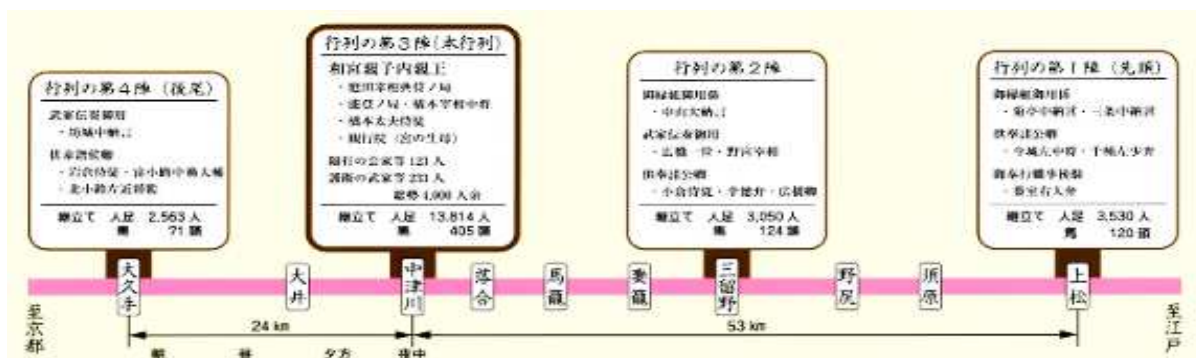
ところが、軽井沢は中山道沿いの場所、一方文京区の家も同じく中山道沿いということで、生まれてから80年たった今、その思い出の場をつなぐように歩いてみることを思いついた。さらに、下諏訪宿の松屋という茶屋が(父方)祖母の実家であり、現存している。その手前の和田峠にかつて西餅屋という4軒からなる茶屋があり、その娘が(父方)祖母の祖母であった。中山道との因縁を感じざるを得ない。祖母ネットワークということで日帰り旅を基本にしつつ中山道に挑戦しようと思った次第である。

【中山道】

中山道は江戸から草津で東海道に合流し、京都まで69次、552kmの道で多くは名前の通り山道になっている。参勤交代では、東海道が146大名に対して、30大名が通るよう指定されていたが、宝永の富士山大噴火で東海道の通行が困難になり、ほとんどが中山道を通行した。すると東海道と異なり川止めがなく、予定どおりに通行できることから、東海道が通行できるようになっても大名は中山道を通り、東海道がさびれてしまうということで1714年には中山道通行制限が出された。当然ながら一般の旅人が中山道を選択する割合はかなり高かったのではないと思われる。しかし浮世絵でも本でも東海道のほうが人気が高かったのであろう、やはり最も有名なのは東海道で、中山道はやや裏道的な印象がある。その後の東海道の発展に比べ、長野県や岐阜県などの山中は昔からの変化がない地域である。このため、かつての宿場の風情があちこちに残っており、佐久市の茂田井、塩尻市の木曾平沢、奈良井の街並みは見事であった。道も甲州街道ほどではないものの、狭い山道であったり、険しい峠道であったりと、日光街道などを歩くよりははるかに趣に富んだ道のりとなっており、長野県に入るとは標高も7~800mは普通あって、少し高くなると1000mくらいで、山々の景色を見ながら旅をするようになった。

【街道のスター】

最初に歩いた甲州街道はいたるところに明治天皇の行幸記念の碑が立ち並んでいた。明治天皇は戊辰戦争で勝利すると、全国各地に行幸したが、特に6大行幸と言われるものがあり、その一つが甲州街道であった。しかし、中山道でも碓氷峠を歩いて行っているし、日光街道も歩いていて多少その記念碑があったもののほとんど目立たない。中山道は圧倒的に皇女和宮である。(中津川中山道歴史資料館の資料)



和宮は孝明天皇の妹で徳川家茂に嫁ぐときに、京から中山道を1861年に歩かれた。中津川市中山道歴史資料館の資料を見ると、上松にいる先陣から大久手の後陣まで77km、和宮は中津川にいて総勢4000人、人足は総勢22,957人、馬720頭というすさまじさである。人足は坪4人という高密度の囲いに押し込まれていたようで、耐えらずに逃げ出した者もいたようだ。まさしく大軍勢と同じで空前絶後の行列だったと思われる。

この規模のせい、どこでも和宮が泊まれたとか、休憩されたとか記念碑だらけになっていた。即ち、甲州街道のスターは明治天皇、中山道は和宮である。日光街道はというと、松尾芭蕉であろうか。芭蕉の銅像とか、歌の碑とかがでてくる。では東海道はどうか。歩いた範囲ではそのような目立ったスターはいない。しかし京の三条大橋のもとにある像は、弥次さん喜多さんであった。そういえば、途中の宿場などでそれらしい人の人形とか絵とかを見た。なので東海道のスターは弥次さん喜多さんということであろう。ともかく、これまで歩いた街道にはそれぞれスターがいるということが分かった。

因みに和宮は10月20日に京を立出し、11月15日に江戸城に入城している。552kmの距離なので、平均22kmを一日で歩いており、ほぼ私の旅と同様のペースであった。ただ私のほうは和宮の大行列とはくらべものにならないただ一人の旅である。

月・日	出発地	到着地	距離	所用時間	備考
2023年					
10月28日	文京区本郷	浦和駅	22.4km	5時間30分	刺抜き地藏通り
11月11日	浦和駅	北本駅	23.5km	5時間32分	強い北風の一本道
11月23日	北本駅	熊谷駅	20.8km	4時間32分	歩道なし県道、荒川土手
12月9日	熊谷駅	本庄駅	24.0km	5時間25分	深谷はなかなか面白い
2024年					
3月16日	本庄駅	倉賀野駅	17.9km	4時間45分	雪の浅間山が見えた
4月6日	倉賀野駅	安中駅	16.0km	3時間47分	碓氷川に沿って歩く
5月11日	安中駅	横川駅	17.8km	4時間18分	旧道が多く残り、景色よし
6月8日	横川駅	中軽井沢駅	17.6km	6時間5分	無事に碓氷峠通過
6月29日	中軽井沢駅	佐久平駅	20.4km	5時間42分	生まれた家を訪問
11月5日	佐久平駅	芦田宿	18.4km	4時間50分	創業250年の旅館に宿泊
11月6日	芦田宿	男女倉口	19.1km	6時間20分	優れた茂田井宿の街並み
11月7日	男女倉口	下諏訪駅	17.8km	6時間35分	和田峠で西餅屋を見た
11月28日	下諏訪駅	洗馬駅	19.0km	5時間3分	風雪に耐えてなんとか
11月29日	洗馬駅	奈良井宿	19.4km	4時間30分	平沢、奈良井の街並み
全体			274.1km	72時間54分	(平均旅行速度3.8km/時)

沓掛(英泉)



和田(広重)



下諏訪(広重)



1. 2023年10月28日(土)晴れ

出発地	文京区本郷	距離	22.4km	旅行速度	4.1km/時
目的地	浦和駅	時間	5時間30分	歩行速度	5.3km/時

- 9:00 文京区本郷 かねやす前出発
- 9:15 西片町:かつての祖母(母方)の家前着
- 11:45 志村坂下を少しいたところで昼食。650円で山菜蕎麦を食べた。
- 12:45 出発
- 13:45 蕨市立歴史民俗資料館 見物
- 13:30 出発
- 14:30 浦和駅到着

江戸時代の川柳に「本郷もかねやすまでは江戸のうち」というのがあって、かねやすの店から先は江戸でなくなるので、かやぶきの家並になり、それまでの瓦葺きの家並から変わったそう。そのかねやすが本郷3丁目の交差点に現存している。江戸時代に歯医者で、それが歯磨き用の乳酸香というのを売り出し繁盛、その後洋品店になり、現在は営業していないが店は存続しているようだ。今回はここを出発点とした。右手に東大があり、その正門前の道を左にまがって少しいくと、5、6歳の頃に住んでいた祖母の家があった西片町になる。戦災に会わなかったので、一家で転がり込んだ。そこに立ち寄ってみると、今はマンションとなっており、当時のお屋敷町の雰囲気はほとんど残っていなかった。



西片町の祖母の家

さて東大前から国道17号線を歩いていくと、巣鴨駅に出会う。そこで脇の道にいくと、刺抜き地藏商店街となる。この商店街が中山道だと今まで気が付かなかった。今回の国道17号は、所々で中山道をつぶして整備されているものの、かなりの部分は旧道が残っていて、日光街道とはかなり異なるので、あの単調地獄は味合わなくても良さそうである。そして江戸4宿の一つ板橋宿になる。これまで品川、新宿、千住と通り抜けたが、どこも東京の一部として開発されてしまっていて、昔の面影はわずかであったが、板橋宿もまた同じであった。志村橋を渡って、昼飯にしたが、客が他に一人もいなくて寂しい食堂であった。そして、戸田橋を渡って埼玉県に入る。江戸時代の荒川は舟渡だが、今は誠に簡単である。

道は平で直線的であるので、ただただ歩いていけばいいようなものだが、川を渡る前後などで細々と折れ曲がる時は注意が必要である。そして蕨宿に入る。ここはまだ街道沿いに典型的な建物が所々にあり、多少宿場の雰囲気が残っていた。その為か蕨宿の表示があり、特に市立歴史民俗資料館が街道脇に立っていた。入ると、かつての宿場の模型だとか使われていた旅行道具とか宿場を偲ばせる展示があった。

浦和に入ると、途中から歩道もないくねくねとした道になり、浦和駅の近くの市街地でも同じである。駅近くの道で歩道がなかったのは、甲州街道の大月駅だけだったように思う。あまり開発が進まなかったということだろう。



かねやすの店舗



祖母の家はマンションに



東大正門

刺抜き地蔵の高岩寺



庚申塚(荒川線の駅がある)



板橋の仲宿商店街





大正元年築の米屋



これが板橋だ



蕨宿にはこのような建物がいくつかあった



歩道に駐車して恥じない車



「おまえさん宿代もってるね」「多分な」

蕨宿模型
市立歴史民俗
資料館



大名に提供した食
事、一汁 5 品おか
しらづき



浦和、調神社

2. 2023年11月11日(土)曇り

出発地	浦和駅	距離	23.5km	旅行速度	4.3km/時
目的地	北本駅	時間	5時間28分	歩行速度	5.3km/時

9:10 浦和駅出発

大宮では古中山道を歩く

10:30~10:35 氷川神社

10:40~45 コンビニでトイレ休憩

11:55 上尾にて昼食。福味味という中華屋でラーメン748円を食べる。野菜がタンメン以上に入っていてボリュームがすごかった。

12:30 出発

13:35~13:45 桶川の中山道宿場館(観光協会)で情報交換など

14:38 北本駅到着

最高気温も15度以下、曇りなので歩きやすいかと思っていたら、正面から強い北風がずうっと吹き付け寒いくらいで、また風に押されるくらいの時もあり、歩行速度も低下した。道が県道164号線で、ほとんど南北の一本道であり、逃げ場もなく黙々と歩いた。日光街道で鍛えられているのだからと、励ましつつ。浦和から少し歩くとさいたま新都心に出会い、大宮駅東口を通るが、かつてこれらの計画に係ったことがあり、議論していたことが実現しているものもあるなど、その変貌ぶりに驚いた。

大宮では中山道古道の方を歩いた。17世紀初期に、氷川神社の神域を通るのは不敬だと、道を西に整備したのが、その後の中山道である。しかし、車の横を行くより、参道を歩く方が圧倒的に気持ちは良いと思われるので古道を選択したのである。ケヤキの並木が約2km続く。日光街道の杉並木ほどの長さではないが、日光街道と異なり、車は排除されているので、快適であった。氷川神社は武蔵の一宮であるが、前にも訪れたことがあるので、社務所によって資料をもらって、そのまま元の中山道に戻った。

上尾では、右手に巨大なショッピングモールが広がっている。イオン・モールである。さいたま新都市、あるいは北区役所の周辺とか、巨大な商業空間が次々に出現する。これまでの街道沿道では見かけなかったが、埼玉県の特徴であろうか。

桶川に入ると、一軒だが昔の街道筋の民家と思われる住宅(小林住宅)がでてき、本陣跡という標識もある。覗いてみると現在は公開していなかった。その先に、中山道宿場館という看板を掲げた建物がある。桶川観光協会の運営によるようで、入ると高齢の男性2名が受付におられた。中山道歩いているんですか？と声をかけられ、その旨を伝えると、関東では本陣の建物が残っているのはここだけと教えてくれる。また中山道に関する本とか寄付された街道歩きの日記とかも陳列されている。そこへ60代くらいのやや大柄な男性が入ってきた。また中山道歩きですかと同じ質問が投げかけられ、どちらからと聞かれると、なんと滋賀県の草津からだと言う。西から歩いてきて、いよいよあと少しで中山道完全走破になるところであった。西から歩くほうが楽なような気がするとのこと。どうも峠も西からは緩い登りで急な下りとなる傾向があるので、きっと東からくると大変だろうと思ったという。やはり和田峠が大変だったようだ。お互いの無事を祈って、南北に分かれた。



浦和駅への道



同じような建築のタバコ屋が多い、皆老朽化している



モナリザの家？



さいたま新都心



氷川神社参道



上尾のイオン・モール



この木どうやって剪定したのか？



旧旅籠（小林家）



桶川本陣跡



桶川の観光案内所
街道歩きの人の立ち寄り先

3. 2023年11月23日(木)うす曇り

出発地	北本駅	距離	20.8km	旅行速度	4.6km/時
目的地	熊谷駅	時間	4時間32分	歩行速度	5.6km/時

9:28 北本駅出発

11:27 吹き上げ駅近くの食堂「滝乃家」で昼食、天ざるそば1050円

12:00 出発

12:35~40 荒川左岸の土手天端でタバコ休憩

14:00 熊谷駅到着

北本駅を出ると県道164号線で、鴻巣を過ぎて県道365号線、一時県道76号線でまた県道365号線歩き続けると吹上になり、その先は概ね荒川左岸の土手の上を歩いて熊谷の街に入っていく。日光街道のように国道となって、かつての風情を全て破壊してしまったわけでないものの、2車線道路で結構交通量も多い。時には幅50cmほどの路側帯しかなく、横をビュンビュンと車が通りすぎるなか、黙々と歩き続けた。ただ沿道には、神社や寺が次々に出でくるし、石碑とかお堂とか、或いは古い民家などが多少残っていて、多少の慰めになっている。

そのまま吹上まで歩いてくると、西に曲がり荒川に出る。堤防の天端が道になっていて、途中からは車の進入を禁止していて、広々とした景色の中を気持ちよく歩くことができる。堤防は荒川の左岸であるが、左手には農地や原っぱがひろがるばかりで、川が全く見えない。川までは距離で7~800mもあるようで、川沿いという雰囲気はない。しばらくいくと、一本の木がありそこに碑があった。昭和22年の9月、カスリン台風で決壊したことの記念碑である。この台風は死者1100人、浸水家屋30万戸と戦後最大の被害を関東平野にもたらしたが、荒川の堤防ももたずここで決壊してしまったということである。なお今年の前半で歩いた日光街道でも利根川の堤防が決壊し、栗橋など広範囲にわたって濁流にのみ込まれた。決壊箇所にはカスリン公園が整備され立派な碑が建設されているようであるが、荒川はうっかりすれば見過ごす程度の痕跡である。江戸時代は堤防もあったかどうか、川沿いの道であったのだろうか、洪水で中山道のルートが変更されるということはなかったのだろうか。富士川では洪水により東海道は何本かルート変更しているのだが。



鴻巣は雛人形で有名。





鴻神社(大蛇を殺したコウノリの伝説にちなむ)



権八延命地蔵(白井権八にちなむ):歌舞伎で有名。実名は平井で130人も殺し金品を奪い、最後は鈴ヶ森で刑死。なんで荒川土手にいるのか不思議



どこに川があるか見えない



木の下に土手決壊の記念碑がある



賽の神道標(明治8-12年修堤、伊藤博文による)

新井家



踏切渡って熊谷駅へ



4. 2023年12月9日(木)晴れ

出発地	熊谷駅	距離	24.0km	旅行速度	4.4km/時
目的地	本庄駅	時間	5時間25分	歩行速度	5.6km/時

9:30 熊谷駅出発

石原あたりで工事のため迂回

10:00~05: 熊谷市玉井あたりで景色を見ながら一服

深谷市東方町2丁目のコンビニでトイレ休憩 8分

深谷駅近くの蔵元「七ツ梅」で酒蔵等をカフェやシネマ等にリノベしたのを見物 10分

12:28 中華料理店大興で昼食、五目旨煮ラーメン715円 わりと美味しかった

13:12 出発

14:55 本庄駅到着

熊谷駅を降りると、目の前に直情怪行、かの熊谷次郎直実が敦盛を招いているのか扇をかざした銅像がある。国道17号線をしばらく歩き、途中から県道264号線となり、道としては単調である。するとここに、お馴染みの明治天皇小休止の碑がポツンとあった。

深谷に入ると、渋沢栄一色になる。新しい1万円札に登場することになったのを記念して、旗が沿道にたなびく。また歴史を感じさせる古い建物がかかり残っていて、なかなか風情のある街並みになってくる。その中で、深谷駅の近くに、かつての酒蔵「七つ梅」が古色蒼然たる姿を現す。七つ梅は元禄7年(1694)に開業し、江戸時代を代表する酒になったが、2004年に廃業した。それを(一社)まち遺し深谷が運営管理を引き受け、古い建物を活用して、深谷シネマをはじめ、色々な店舗やギャラリーなどを入れた。950坪と広い敷地一体が昔の風情を保っている。フラフラと中に入ると、横の店から中年の女性が出てきて、「どちらから?」と話しかけて来る。中山道を歩いていることを話すと、がぜん張り切って、まわりの説明をしてくれた。

国道17号を離れ、小山川を渡ると県道となり、ただひたすらに歩き続けて本庄駅に着いた。



熊谷直実の銅像



熊谷寺



のんびりとした区間は歩きやすい



左が17号線、右が中山道



明治天皇休憩記念碑（中山道も歩いた）



熊谷の銀杏並木は松から始まる

深谷の市街地にある大谷邸(江戸時代からの豪商)



深谷の七つ梅酒造 →





元小山川 北関東は鉄塔だらけであった

滝岡橋



5. 2024年3月16日(土)晴れ

出発地	本庄駅	距離	17.9km	旅行速度	3.8km/時
目的地	倉賀野駅	時間	4時間45分	歩行速度	4.9km/時

10:00 本庄駅出発

12:13 伊勢島神社境内で休息

12:30 出発

13:15 烏川橋爪にあるカフェで昼食。800円のピラフを食べた。

13:47 出発

14:45 倉賀野駅到着

今回は歩行速度が遅かった。その原因はよく分からない。少し重い靴を履いたせいとか、何か所か道を間違えたりしたせいとか、結果予定より遅く目的地につくことになった。

もう一つ特色は何かというと、コンビニが倉賀野駅の近くまで全く一軒も見当たらなかったことで、こんなことは初めての経験で、また飲食店もほとんどなく、もしかしたら昼食なしで目的地まで歩くのかと覚悟していたら、烏川のたもとにカフェを発見、ようやく飯にありつけた。一方旧道らしく社寺は17か所もあつたり、庚申塚や常夜燈など街道の付属品は各所にあつた。道は多くは県道クラスで自動車交通はそれなりにあり、一方歩道はろくに整備されていないという状況である。

倉賀野の少し手前に岩鼻という土地があるが、江戸時代にここに代官所があつて、曾祖父が一時その剣術指南として派遣されていた。立ち寄ってみると、跡地にはきれいになにもなく、代官所があつたという案内板が色あせて立っていた。



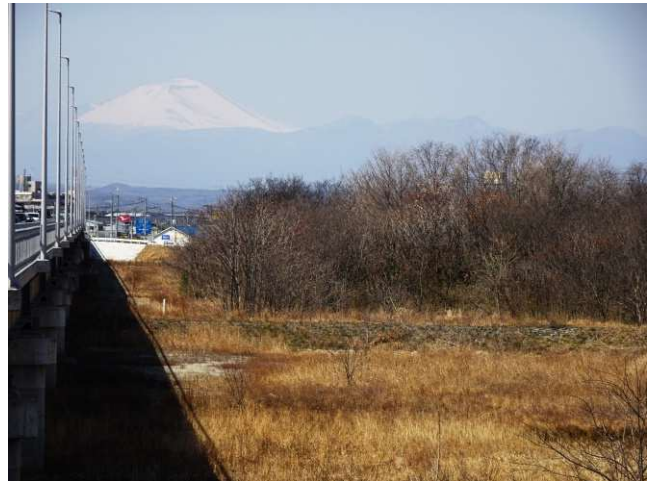
本庄は蔵の街と看板が出ていた



541年創建された金讃神社
本庄の総鎮守



浅間神社で浅間古墳の上に建てられている。古墳は高さ約6m、古墳時代末期
どうして浅間神社は富士山なのか？



神流川から雪を頂く浅間山が見えた



江戸時代の豪農、川端家。国有文化財



これでも中山道なのだ



烏川の堤防道



岩鼻代官所跡地

6. 2024年4月6日(土)曇り時々晴れ

出発地	倉賀野駅	距離	16.0km	旅行速度	4.2km/時
目的地	安中駅	時間	3時間47分	歩行速度	5.3km/時

10:05 倉賀野駅出発

12:15 八幡大門そばのそばうどん店で昼食。テンプラ蕎麦 1600円

13:02 出発

13:52 安中駅到着

今回は距離も短く、特に複雑なところも無く、楽に目的地に到着であるが、暑かったせいか思ったより疲れた。とくに大変だったのは昼食である。テンプラ蕎麦を頼んだのだが、巨大な海老天プラが2つそばえ立っていて、蕎麦は汁深く潜ったままで、表面は全く見えない。この巨大エビ天を処理しないと、なにも食べられないので、まずこれにかぶりついたのである。ところがとんでもなく熱い。とてもかめるものではなく、まだそばつゆを味わって見ると、これも熱くて飲めない。息を吹きかけ、フーフーと食べるのだが、それもあまりに熱いのでほんの少ししか食べることができないのである。お椀の奥に箸を入れ、蕎麦を掻き出して、試しに食べて見ると、細麺であまりの熱さのせいか、伸び切ってしまって、ダラーとした塊になっている。必死にエビ天の処理にかかっていると、すごい量の衣で衣だらけの蕎麦になってしまって、蕎麦を食べているのか衣を食べているのか判然としない。どうしようもないので、水を注ぎ温度が多少下がったところで、再度挑戦し、なんとか2本のエビ天を片付けた。この海老は、確かに海老ではあるが味ではなく量で勝負している傾向があり、まだまだ蕎麦と衣が残っていたが胃が受け付けなくなってきた、ついにギブアップした。食べ始めて40分くらいのことであった。

蕎麦との格闘を終え、少し歩くと安中駅で、なつかしい東邦亜鉛の工場が昔のまま駅前の斜面を覆っていた。ただ安中駅の前は高架道路など、そこら中が広幅員道路だらけで、どうやったら駅にたどり着けるのか、にわかには判断が付きかねた。



倉賀野駅前の通り



須賀喜太郎脇本陣
倉賀野



だるま弁当の会社



高崎駅への通り



1787年創業の河内屋が明治に始めた醤油店



鳥川に架かる君が代橋



1本目のエビフライを食べた段階のテン
プラ蕎麦の状況



遠く妙義の山々が見えだした



板鼻にある諏訪神社



東邦亜鉛の精錬工場（安中駅から）

7. 2024年5月11日(土)晴れ

出発地	安中駅	距離	19.2km	旅行速度	4.5km/時
目的地	横川駅	時間	4時間18分	歩行速度	5.2km/時

10:45 安中駅出発

途中新島裏の旧宅を見物する

12:08 八本木あたりのラーメン屋で昼食。塩ラーメン650円であっさりと言った。

12:35 出発

14:35~14:40 碓井神社で休憩

途中道を間違える

15:03 横川駅到着

パソコンのナビタイムとうソフトで、電車の検索をしたところ、大宮9:06発のはくたかにのり、高崎で信越本線に乗り換えると、安中に10:04着という結果がでたので、その予定で出立した。ところが、高崎駅にいくとそのような電車はなく、約40分後ようやく横川駅行き電車があるだけで、おかげで大幅に予定に後れてしまった。平野から変わって来て、妙義の山々が近づく。碓井川とその谷筋を行く旅程で、景色に恵まれ、大分雰囲気が出て来る。安中が標高135mで終着の横川駅は標高390mなので、少し登りがあり、また登ったら谷底へくだらなければいけないなどアップダウンも所々であり、甲州街道を思い出す。道も県道や国道から山の方へ登っていくと、旧道がかなり残っていて、そこは車に出会うことも少なく気持ち良く歩くことができた。やたらと「安政遠足→」という看板が目についた。そこでテレビなどでよく仮装して安中でマラソンしているところを見たことを思い出した。行ってみて分かったのだが、翌日の12日(日)にその安政遠足というマラソン大会が開催されるようだ。第50回だそうだ。当然だが江戸時代のマラソンなので昔の中山道があればそこを走る。そのため、歩いていると良くその方向指示の看板が出て来たわけで、おかげで助かったが、やはり江戸時代ではなく大勢の人が走るの、道の狭い部分は新しい道を走るようである。

安政遠足(あんせいとおあし): 安中藩で藩士の訓練で、安中城から碓氷峠の熊野権現神社まで約30kmの徒歩競争を行った。日本のマラソンの発祥とされる。それを記念して1975年より、坂本宿までの約20km、碓氷峠の28.97kmの2つのコースでマラソンが開催されるようになった。様々な仮装をして走る人が多く、翌日は約1600人が参加したそうだ。

さらに横川に来ると、電信柱に熊が出没するので注意という看板が出現する。碓氷峠は熊の生息地であるのだが、市街地は大丈夫かと思っていたら、どうもこちら辺までは出張してくるようだ。横川駅に入ろうとすると、入り口の戸が占められていた。どうしてかを見ると、「開けていると動物が入ってくるので、必ず占めて下さい」という注意書きが張られていた。

40分も遅れて出発したので、横川を見物する間もなく、15:10発の高崎行きの電車で飛び込んだ。

安中にある有田屋。天保3年(1832年)創業の醤油屋、明治5年に日本初の私設図書館開設





碓井川と妙義山を眺めながら

安中にも杉並木があった



新島襄の住んでいた家



遠く浅間山が見えた



松井田の街並み

50回の安政遠足の看板





松井田には所々古い家が残っている



元文5年（1740年）に村で建てた碑があった



山道に入ることもあった



碓井神社



8. 2024年6月8日(土)晴れ

出発地	横川駅	距離	17.6km	旅行速度	2.9km/時
目的地	中軽井沢駅	時間	6時間5分	歩行速度	3.5km/時

10:05 横川駅出発(標高390m)

11:52 南向馬頭観音(約6km 地点)で昼食、おにぎり2つ、チューブ入りジェリーを岩の上で。

11:12 出発

13:50 熊野皇大神社着(標高1200m)

14:10 出発

14:50 軽井沢宿到着、旧軽でお土産購入

15:40 離れ山交差点近くで休憩

15:50 出発

16:10 中軽井沢駅到着(標高940m)



いよいよ和田峠と並んで中山道最大の難所と言われる碓氷峠を越えなければいけない。かなりの距離の山道を歩くだけでなく、途中アップダウン付きで約800mを登るコースとなる。箱根も同じくらい登るが、距離も短くダウンなしに登るだけなので、やはりこれまでで一番きつい地形である。しかしこの半年、頭を悩ませたのは、地形ではなく熊の出没である。ここ2~3年熊が各地で出没し、大怪我をした人、殺された人のニュースが頻繁に報道される状況だ。しかも軽井沢とか碓氷峠は昔から熊が多いことで有名で、里に近づかないよう様々な対策が取られていて、それが報道されることすらある。しかし中山道歩くということは、逆にこの熊たちの生息地に踏み込んでいくということで、まあともではない。冬眠している間に、といっても寒冷地の山を冬場に突破するのは素人では無理。真夏は暑いし、ということで雨期に入る直前に強行することとした。ただ丁度交配の時期で熊の行動範囲が広く、出没回数も多い時期で、うれしくないタイミングだがヤム得ない。命のあつての物种、色々と対策準備をした。前に甲州道中の小仏峠越えで購入したクマよけスプレーが最後の命綱で、これを肩から下げ、直ぐに発射できるようにした。また音を出すということで、携帯の小型ラジオ、さらに脅かそうとクラッカー、子ども火薬ピストルも北区赤羽のおもちゃ屋で購入してある。それに笛もある。ま

たハサミも持って行った。コンビニの包装を切るのにも使えるし、万一最後となった時、多少とも熊に一矢報いることができるかもしれないなどと考えた。江戸時代なら刀とか槍でももっていけばいいのだが、現代では不可能である。なお山ヒルが多い、ヒル対策をしたほうがいいと書いている人もいたので、ヒル除けのスプレーも買って、前日に靴とかズボンとか足回りにしっかりと対策を施した。上からはほとんど落ちてこないそうである。

ということで、幹線道路から細い道を通って峠道にはいった。笛をもってくるのを忘れていた。携帯ラジオは山に入ったらまったく無音になってしまった。しょうがないので、「エイ！ホー」とか適当な掛け声を発したりしつつ歩いた。ここの山は岩石が多く、落石注意の看板があり、道は岩だらけの箇所が多い。さらに倒木も多い。土日なので中山道歩きをする人が多ければ安心だが、横川駅で多くのハイカーが降りたので期待したのも空しく、皆かつての鉄道敷地を遊歩道にしたアプトロードに行ってしまった。それでも、しばらくして、男性の2人組を追い抜いたので、聞いてみると残念ながら彼等もまたしばらくいってアプトロードに行くということであった。ところが峠から降りて来る人が結構いた。夫婦が2組、男性の一人旅が2組で4組に出会った。みな鈴をつけてクマよけ対策をしていた。

ようやく尾根道に出てしばらくいくと、道に大きな糞を見つけた。まわりには少し小さいのも分布している。また爪痕がしっかり残る足跡がある。どう見ても熊の糞である。糞にはハエがたかり始めている。すれ違った人がだれもこのことを言わなかったので、おそらく過ぎ去って、私が来る間に熊がここをとったといところだろう。30分違いというところか。こういう所からはすぐに退散すべしとネットに書かれていたので、早々に先を急いだ。すると10mほど先で道路を横断している獣がいる。猿である。2匹いる。熊は出なくて良かった、が猿でも攻撃してくると面倒なので、じっと様子を見ると幸いにこちらにはまったく関心を寄せず、悠々と右手の林へさっていった。野生の動物が多い所だが、途中で昔は茶屋が13軒あったとか、なかには25人も生徒がいた山中小学校の跡というところもあり、人間もこの山中に生息していたのか、不思議なところだなというのが感想である。なお明治11年明治天皇がここを巡幸した際に、25円の奨学金の下付があったそうだ。

きつい登りが続くので、汗だくになるし、だんだんエネルギー不足でやはり大変な難路である。しかし森の中を歩いているため、木漏れ日だけで日射に悩まされることはなく、そういう点では歩きやすい道でもあった。熊野皇大神社のある峠に到達し、少し下ると旧軽井沢の町にでた。子供のころから通ったところだが、ほとんどの店は変わってしまっている。さらに歩いてともかく沓掛(中軽井沢)まで到達。無事に帰還できてほんとに肩の荷が下りた気分であった。なお不思議なのは、碓氷峠を書いた浮世絵が無いことである。東海道と同じく中山道は各地の風景が浮世絵となっていて、見ると坂本宿の次はいきなり沓掛宿になっていて、間の峠はまったく絵になっていない。宿場がないからなのか、でも川の渡しとか箱根峠とか他は絵になっているのに。



横川駅前に峠の釜めしの荻野屋発祥の店がある(明治18年)



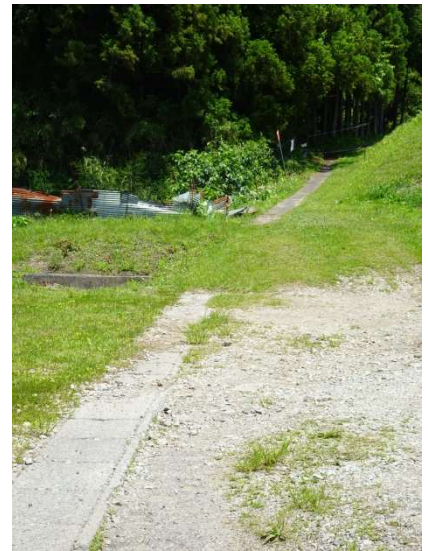
碓氷関所の東門、関所本体は山の中で跡形もない



松井田西中学校が廃校となり、MUSEE MATSUIDA というミュージアムになった。安中現代美術展などが開催されている。



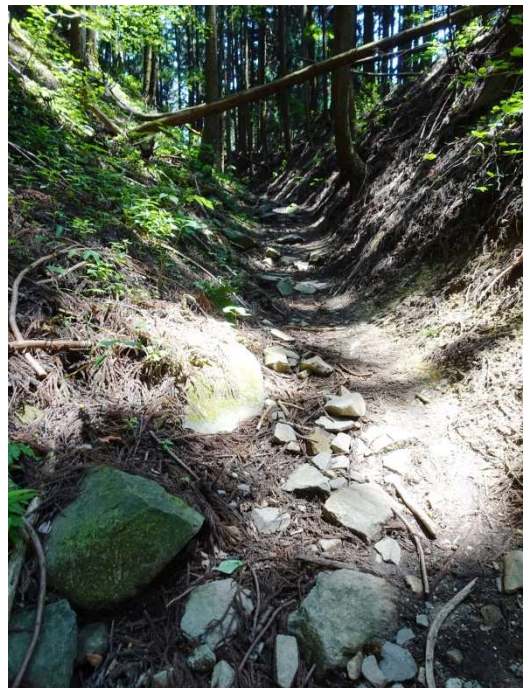
MUSEE の近く、フリーマーケットの入口に影響を受けたか、こういうオブジェがあった



この細い道の奥から峠道になる。入口には高圧電線が張られており、その端を外して先に進む。恐らく山からの動物進入を阻止するためであろう



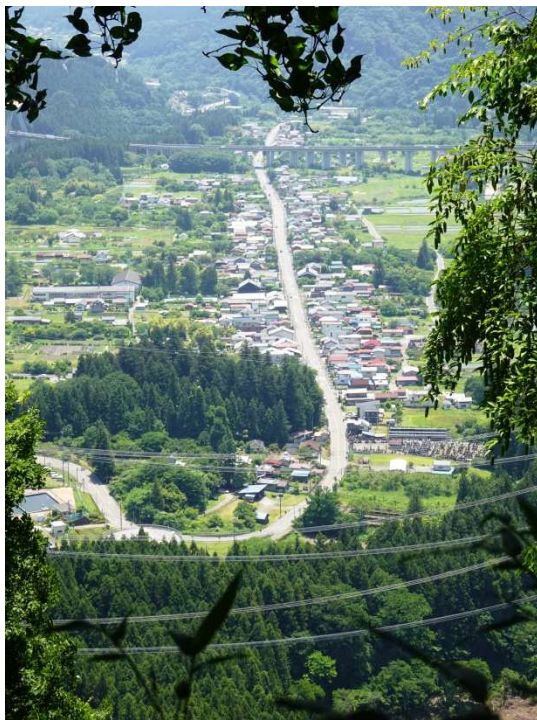
延々と上り坂が続く





柱状節理の岩肌になっていた

芭蕉の句碑など
まとめて整理



700-800m ほどまで登と「覗き」といわれる所があり、ここから坂本宿が一望できる。この場所以外では木々に覆われ、外は見えない道が続く。
小林一茶が「坂本や 袂の下の 夕ひばり」と詠んだ。



勿石茶屋跡。4軒も茶屋があった。石垣がわずかに残っていた。



関所跡、なにも残っていない

道がえぐれて
危険な箇所





猿が横切った



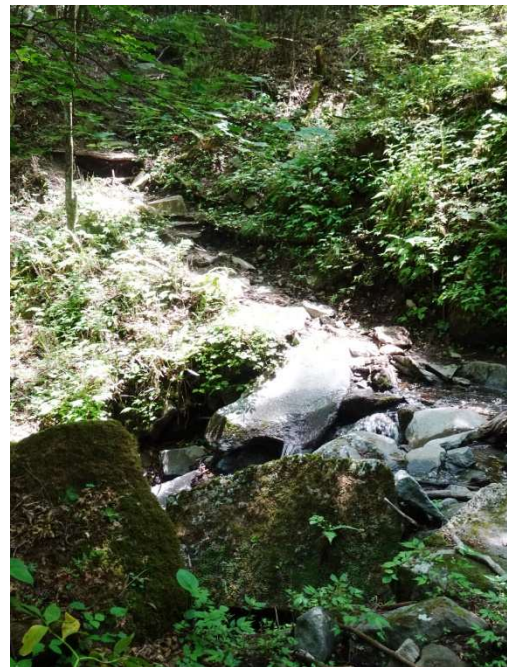
尾根は実に気持ちの良い道であった



なんのためかバスが放置されている。軽井沢のディヴェロッパーのようだが、どうやってここまで持ってきたのか分からない。謎のバス



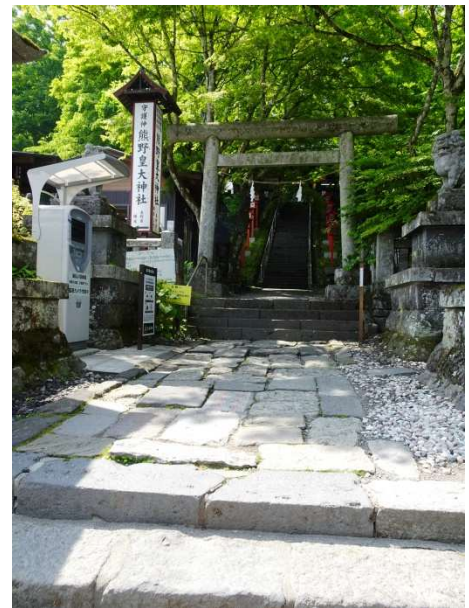
右に行く道は皇女和宮のため整備された道
安政遠足は右手をいく



石伝いに沢渡りし、再び険しい登りになる
幸いヒルには出会わなかった



熊野皇大神社は群馬、長野の県境にあり、右手拝殿は群馬県向け、中央は長野県向け



最後の下りは道がほとんどない箇所がある。あまりに急でこのロープにしがみついてずり落ちた



長野県最古の狛犬（室町中期）



横川から4時間45分かけて旧軽井沢に到着

道がわからなくなって、この中山道の標識を見つけた。このロープにつかまりながら、滑り落ちないように慎重に横に進む

9. 2024年6月29日(土)晴れ

出発地	中軽井沢駅	距離	20.4km	旅行速度	3.6km/時
目的地	佐久平駅	時間	5時間42分	歩行速度	4.8km/時

9:05 中軽井沢駅出発

9:37 祖母の別荘に到着

10:05 別荘出発

11:40 追分のCAFÉにて昼食。スープとフレンチトーストで1600円。トーストは良かったがスープはさっぱり。

12:15 出発

12:20 中山道63次資料館に入る

12:35 資料館出発

13:27 皇女和宮160周年記念で整備した休み処で休憩(小田井宿)

13:37 出発

14:57 佐久平駅到着 駅へのアクセスがわかりにくく大変苦労した

いよいよ生まれた家を訪れた。祖母の別荘があって、戦争中に母がそこに疎開、そこで私が生まれた。その後も夏になると訪れていたが、久しぶりに覗いてみると同じように建っていて、しばし思い出に浸った。また中軽井沢駅の方まで戻って、追分に向かって登る。18号線の最高点が1000mほどで、標高があることと、木々が多いことから暑さも感ずることなく歩ける。昔にくらべそこら中が別荘化している。特に追分宿のあたりは、公園が整備されたり、街道の雰囲気を醸し出すような修景整備がなされていて、若干観光地化している。予定していた蕎麦屋が臨時休業していたが、少し先にはCAFÉがあり、そこで昼食をとった。その先に

民間による中山道63次資料館というのが出て来た。入ってみると、中山道の各宿場の写真とか浮世絵や、関連する出版物などところ狭しと展示されていた。これを開設された方と思われるご老人が、色々と説明してくれる。面白かったのは、アナウンサーが「旧中山道」とあるのを「一日じゅうやまの道」と読んでしまったという話。御代田をすぎ、ひたすら道は下るが、それに伴って急に熱くなってくる。さらに木々もなくなり、強い日差しにもろに照らされて、熱中症を警戒しつつ必死に歩き続けた。すると小田井宿にでるが、その入り口に「おはる地蔵」という地蔵が建っていた。まだ新しい。なんだろうと立て看板の解説を読むと、平成3年に死んだ安川はるという女性の菩提を弔うために建てたようだ。ところがこの女性の生涯は尋常ではなかった。明治36年に小田井に生まれ、その後教員などをしていたが、その後親の反対をおして上京。人糞と種麦を焼却して肥料を作る研究に没頭し、ついに燻炭肥料の生産に成功するも、難病にかかる。病のなか自らの血をもって観音経220、般若心経25巻などを写経。また戦時中には大勢を引き連れ開拓にいそしむなど活躍し、地域にも貢献したようだ。小田井の宿場は、安川家が本陣を務めたが、まだ宿場の風情が残っている。そこで驚いたのは、皇女和宮がここで昼食をとった、それだけなのに160周年を記念して、道路わきに休憩所が整備されていたことである。ともあれ、酷暑の中の旅人にとってはありがたく、しばし休息した。岩村田に入ると、お思っていたのとは異なり、立派な市街地が形成され、小諸とまではいかないまでも、地域の拠点的な都市であった。

生まれた家（中軽井沢）



懐かしい野草の花々が咲いていた





廿三夜供養塔（沓掛）



快適な追分の道



浅間山を祭る遠近宮（沓掛）



名主土屋家の黄壁布屋、1670年創業の米穀問屋



追分は良く景観整備されている。右は諏訪神社



18号線の最高点だと思うが



1650年柏木小右衛門が開削した農業用水路。千ヶ滝湯川用水温水路





小田井宿の街並み。所々に昔の風情を残す家がある



岩村田の市街地



浅間山はついに雲に隠れ、姿を拝めなかった

10. 2024年11月5日(火)曇り

出発地	佐久平駅	距離	18.4km	旅行速度	3.8km/時
目的地	芦田宿	時間	4時間50分	歩行速度	5.1km/時

10:00 佐久平駅出発

11:50 八幡の百沢橋手前にあった「喫茶館談話室まる」で昼食。他には一切選択肢なし。グアテマラコーヒを飲んで、フレンチトーストを食べた。

12:40 出発

13:45 小休止

13:58 出発

14:00 元禄2年創業の大澤酒造の資料館を見物、ついでに善光寺秘蔵酒というのを買う。

14:08 出発

14:50 金丸土屋旅館に到着

天候が会わず、4か月以上の間をおいて、ようやく和田峠挑戦の機会が回って来た。このため、衣類や種々の物でずっしりとしたリュックサックを背負って歩くという、これまでになかった旅になった。望月宿の手前までは、

概ね県道となっていて、時々車が横をとおる道を黙々と歩く。感心したのは、中山道の道標が至る所にしっかりと整備されていたことで、佐久市ではとくに丁寧に道案内していたので、大変便利に歩くことができた。中仙道は観光資源としてある程度評価されているようで、街並みであるとか資料館であるとかが良く整備されている。しかもわずかなアップダウンが或る程度の道でもあり、歩いていれば自然に目的地についてしまうような気安さである。望月のところが多少標高が上がって、急な瓜生坂を下って街に入るところがやや複雑なくらいである。望月宿を過ぎると、間の宿(宿場と宿場の間の準宿場)として茂田井と言う所がある。これが行ってみてビックリの街であった。ガイドブックには記述は全くないが、伝統的な和風建築物が立ち並び、伝統的建築物保存地区に指定されていないのが不思議なような街並みが出て来る。見ると、商家や宿より一般住宅が多いようなのだが、どれもが偉く立派な造りであり、何でこのような建築が可能だったか不思議である。この中に元禄2年(1689年)創業という大澤酒造がいる。大澤家は名主も務めていたようだ。資料館も併設されていたが、ともかく夜のお酒を仕入れた。このあと石割坂という急坂を登り、立科町役場を左手にみて、芦田宿で唯一残った宿に到着する。文化元年(1804年)創業、当時は旅籠津ちやという名称だったようだが、現在は金丸土屋旅館。一部は創業当時の建物が残る古い純和風旅館で、部屋は八畳部屋に床の間付き、ただしテレビはついてなく、炬燵が部屋の真ん中に鎮座していた。泊り客は自分だけのようで、一人夕食をとり、部屋に戻って一杯やった。



諏訪神社



塩名田の街並み



中仙道はこれを降りて行く



古墳だったのか塚と思われるものが見えた。地名も塚原。



塩名田宿の街並み



ここを下っていくと千曲川にでる。



千曲川



望月宿の入口にある百沢集落の街並み



貞観8年(866年)創建の八幡神社



瓜生坂を下って望月宿にでる



望月宿の街並み



茂田井 一 間の宿
驚くほどかつての街並み
が保全されていた。



1689 年創業の
大澤酒造

資料館が併設さ
れている



芦田宿の本陣：武田24将の末裔の土屋家



宿泊した金丸土屋旅館と泊まった部屋



11. 2024年11月6日(水)曇り

出発地	芦田宿	距離	19.4km	旅行速度	3.1km/時
目的地	男女倉口	時間	6時間10分	歩行速度	3.8km/時

8:20 金丸土屋旅館出立

10:15 今回の行程で唯一のコンビニで小休止

10:30 出発

11:50 和田宿の古民家カフェ「えんの家」で昼食、大葉ジュノーベースパゲッティ 1750 円を食す

12:30 出発

12:50—13:00 タバコ一服

14:30 男女倉口(おめくらぐち)に到着。すぐそこに和田峠登り口がある

15:30 唐沢下まで戻って宿の送迎車を待つ

15:50 民宿みやに到着

この日は標高718mの芦田宿から1094mの男女倉口までの登りで、とくに和田宿からはずっと急な登り続いた。また芦田宿出て直ぐに笠取峠(907m)を越える必要もあり、かなりハードな行程となった。気温は低く、朝は5度くらいであろうか。しばらく行くと立派な松並木が現れる。ほぼ公園化されたような道で、自転車ともすれ違った。佐久市からは、とにかく中山道の道標がしっかり整備されているほか、多少道も歩きやすく整えているようで、大変助かった。県道142号線に所々合流しながら長久保宿に至る。大門川を渡り、ずっと田舎道を歩いていくと和田宿となるが、その入り口に古民家カフェがあってここで昼食をとった。他に選択肢はなく、昨日に続いて今日もカフェだが、宿がしっかり和食なので丁度良い。茂田井は別格であるが、各宿

場はそれなりに昔の面影を残しているのは、これまでの街道にはない事であったが、和田宿では昔の建物がかなり残っており、地域でも中山道の宿場であったことを主な魅力としてとらえているようだ。バス停まで地元の人達がかやぶきの家を建てていることもその表れかもしれない。しかし宿場を抜けるとほとんどが県道142号線になり、歩道も無いことが多い。そこを走っているのがトラックという状況で、きつい登りを轟音を立てながら横すれすれを通り抜けていく。それもひっきりなしで、この道が諏訪方向と佐久方向をつなぐ重要な物流路線となっていることを示していた。その中を延々と登り続けていくと漸くにして男女倉口に到達する。そこから50mほど入ると和田峠入り口になっていた。ここで民宿みやの送迎サービスをお願いする。しかしそれは午後3時半からと言われ、あと1時間も時間を持て余した。これは同じく2泊で諏訪に入った甲州街道の2日目、青柳駅で1時間半も電車をまったことと同じような事態にまたあってしまったことになる。多少宿の手間を省けるかと、そこから唐沢の集落の下まで戻って、宿の車にのった。宿は大門口沿いにあった。和田峠に一番近い宿泊場所となっているので、宿の主人の話では年間1000人以上も和田峠に向かう人が泊まるとのこと。この日も私を入れて4人が和田峠越えとなっていた。一人はこの宿からスタートだったが、若い夫婦は同じように和田峠入り口まで宿の車で送ってもらうこととなっていた。



道端の分らない石碑
笠取峠の松並木

中仙道原道というのに入ったら、道がなくなって最後は石垣を這い降りることになった

この石垣 →



笠取峠を抜けると松尾神社の境内にでる

長久保宿





中仙道最古の本陣建物:長久保の石合家(17世紀)



雨が多かったせいか滔々と流れる大門川



地域住民によるバス停



昼食をとった古民家カフェ



旅籠「かわち屋」 資料館となっている。



和田宿の民家



和田宿本陣(一時役所になったのを再生したもの)



遠く初めて見えた浅間山



和田宿の街並み



民宿みや (標高680m)

12. 2024年11月7日(木)晴れ

出発地	男女倉口	距離	17.8km	旅行速度	2.8km/時
目的地	下諏訪駅	時間	6時間25分	歩行速度	4.0km/時

7:55 和田峠口出立(標高1094m)

9:10—9:20 東餅屋到着(標高1476m)

9:40—9:15 和田峠到着(標高1600m)

10:55—11:05 小休止

11:20 樋橋茶屋跡に到着、そこに公民館がある。トイレとベンチがあってそこで昼食。昨日買った菓子パンを食べた。

11:55 出発

13:00頃 木落とし坂から道を間違い 30分ロス

13:40—13:50 諏訪大社春宮到着

14:00—14:10 文学館で休憩

14:20 諏訪大社秋宮

14:30 下諏訪駅到着

ついに和田峠越えの日。朝6時30分朝食、宿を7時20分に出て車で和田峠口まで送ってもらう。気温はぐっと低く2度であった。宿で一緒だった夫婦とは、所々の休憩場所で出会う状況で、ほぼ同様のペースであ

った。他に人がいれば、多少熊に安心だが、クマザサが多い道で、例によって熊よけスプレーや火薬で音のする玩具のピストルなどをもって、慎重にのぼる。一か所熊の足跡があったが、あとは何もなくすんだ。中山道では、街道の整備にかなり努力しているようで、快適に歩ける環境となっており、気が付くと東餅屋に到達してしまっただけで、その近くに開発されたドライブインもすでに廃墟となっていた。そのドライブインに黒曜石という大きな看板があった。ひょっとすると、その周りに黒曜石が落ちていないかと、地面を見つめると、直ぐに見つけることができた。周囲に砂利をひいているのだが、店の近くだけには黒曜石交じりの砂利となっていたのである。ただし、小さなものしかなかった。石器時代、縄文時代には和田峠はこの黒曜石で大いに繁盛したと言われるが、見つけられたのはここだけであった。峠につくと、珍しく素晴らしい見晴らしとなっていて、どれがそれだか分からなかったが御嶽山が見え、下を見ると岡谷とおぼしき市街地が広がっていた。幸いこの日は天気も良く遠くまで視界が広がる。

後は約900m下るだけである。しかしかなりの急斜面で、細い道筋がかろうじてジグザグにおりていくことが判別できるなか、滑り落ちないように用心して下った。標高1280mのあたりに西餅屋跡がある。昔はここに4軒の茶屋・立場があって、そのうちの1軒が下諏訪の祖母のさらに祖母の実家であった。すでに石垣を残すだけの平地となっている。また墓が周りがあるが果たして先祖のものかどうかは分からない。祖母は小さいころより、ここへ泊まりに来ていたようで、いくつかそのことを書き記している。

祖母の書いた姿見日記より

寒さが全く去って、田に青い稲が見える五月の末には定って祖母の生家へ祖母に連れられて行った。「おばあ様、おたのしみだなあ、孫たちを連れてどこへお出かけえ」田や畑から長閑な声が高く聞こえた。其家は和田峠の中腹で、昔江戸へ通じた中仙道のたてばの一つと成っていたので人家は四軒しかなかったが人は割合にすれて居た。四軒が四軒力餅を競争で売った。馬に乗って行く人、草鞋がけでゆく人、三々五々、其のまま腰がかけられる様に成っている座敷に休んではお茶を飲んでお餅を食べた。次の宿場から来ている、中川治郎、とか翠川與五平とかいう木版で摺った宿引の紙札が、テカテカ光る大きな大きな大黒柱に下がっているのを、一枚ずつ取っては下女はそれらの客にくぼった。生家の家では此外に蚕種屋もしていた、薪炭の卸もしていた、田も作っていた。男や女を十人も使っていたがそれでも手は足らなかった。

この祖母の祖母には言い伝えが残っている。結婚の時、親が決めた相手が気に食わず、下諏訪宿まで下って、花嫁衣裳を売り払い、相手の男の処にいて、結婚する気はない、この金で勘弁してくれと破談にしてみました。さてその先になるとまたトラック交通の激しい県道142号線となって、ひたすら下る。水戸天狗党がかつてこのあたりを通過したが、その際高島藩とか、松本藩など地域の大名との戦の戦死者(天狗党)を祭った塚がある。さらに下ると御柱の時の木落をする木落坂に至る。急な崖に大木が突き出し、そこから下を除くと、よくもこんなところに突っ込むものだと驚く。男を見るなら木落と言われるが、まあ半端な度胸では務まらない。ところがここで道を間違ってしまった。ここから急な崖を降りて対岸の道にでなければいけないのだが、路側にある標識の前に塚があって、見えなかったため、左に曲がる道をそのまま進んでしまった。しばらくしてどうもおかしいと気が付き、引返して周辺を慎重に見て回ると、小さな標識が見つかった。この後は大体知っているような道になり、無事に諏訪大社春宮に到着。無事和田峠を越えられたことに感謝し、かつて知った下諏訪の街に入った。思っていたより、和田峠そのものは厳しくなく、下りの一部を除けば道も整備され、登りの勾配もそれほどきつくなかった。ただ越えるにはそうとうな距離を歩くことが必要なだけであ

る。



和田峠登り口における雄姿？



和田川に沿って登っていく



接待茶屋：11 - 3月の間、焚火にあたりながら粥を提供する民間によるボランティア事業があった



雨が多かったせいか至るところに水が流れていた



避難小屋、ここから石畳になった



東餅屋跡





和田峠の頂上が近づいてくる



峠からの眺め、どれかが御嶽山



遠く岡谷あたりの市街地が見えた



多分賽の河原のつもり



急な下り、崩れそうな斜面地をひたすら降りる

西餅屋があったことが看板になっていた



和田峠へ向かう中山道、左手奥に祖母の祖母がいた家があった



今残るのは石垣だけとなった



西餅屋の写真（明治時代）
右手前の家が祖先の家にあたる



中仙道の標識が整備されている



浪人塚：水戸の天狗党がここで高島藩等と戦闘、
天狗党の死者がここに葬られている





木落とし坂：御柱を谷に落とす所



2004 年に見た木落とし



諏訪大社春宮

1300 年創建の慈雲寺入口



下諏訪宿の街並み



下諏訪宿本陣、岩波家



下諏訪宿の茶屋「松屋」跡：祖母の実家、江戸時代の家が現存

13. 2024年11月28日(木)晴れ後雪

出発地	下諏訪駅	距離	19.0km	旅行速度	3.8km/時
目的地	洗馬駅	時間	5時間3分	歩行速度	4.6km/時

- 10:30 下諏訪駅出発(標高767m)
- 12:10 塩尻峠頂上に到着、昼飯を食べる(標高1055m)
- 12:35 出発
- 13:15—35 長野自動車道みどり湖パーキングエリアで休憩
- 14:45—55 縄文・弥生の遺跡がある平出で休憩
- 15:33 洗馬駅に到着(標高773m)

歩きやすい道で、しばらく行くと、岡谷市の今井集落になる。岡谷市はなにしろ人口の2.89%が今井姓で、全国市町村の今井割合で第8位、なので今井集落もあるのだろう。ここに明治天皇も休憩した今井茶屋本陣とか、今井関所などの跡があった。その先は次第に山になり、遠く諏訪湖と富士山がパノラマになってみえる素晴らしい展望も開けて来た。そして塩尻峠になるが、道はずっと舗装されていて、山道というわけでもないのだが、勾配がやたらきつい。地図で確認すると平均25%くらいである。息が切れて一休みというのを繰り返しつつ頂上につく。昼時となったので、カロリーメイトの昼飯にしたが、やたらと寒く、手はかじかんでしまい、冷たい風が吹きつけてくるので、早々に立ち去ることとした。ただ下っても標高は900mくらいはあって、風もあり寒いことにあまり変わりはなかった。やがてかつては一大宿場町であった塩尻になり、その後は、街らしいものもなく吹き晒しの平原をまっすぐに道は突きっていく。ところが、次第に曇ってくるだけでなく、チラホラと粉雪が舞い出した。さらに南から平均風速6~7mの冷たい風が吹きつけ、それに雪がのって激しく打ち付けてきた。天気予報はどれを見ても晴れとなっていたのにである。ただ旅の最後は雨にたたられるのでは、とふと思っって小さな折り畳みの傘を持ってきた。かじかむ手に傘とガイドブックを持って、ひたすらがむしゃらに歩く。真正面からの風なので、それに押されペースは上がらず、前は良く見えないと、どうにも冴えない。我慢を続けていると、ようやく洗馬駅(せば)に到達した。無人駅でトイレもない駅ではあるが、駅舎に入れば風を防いでくれ、ほっと一息入れることができた。なおこの日は塩尻に戻って、駅前にある中村屋ホテルというところに泊まった。立派なホテルだったが、訳ありというコースがあって一泊8300円、部屋は15畳の畳部屋であった。何が訳ありなのか、そういえばトイレのウォッシュレットが壊れていたもので、出発時にそれが訳ですかと聞くと、なんとホテルはそれは知らず、部屋にバスルームがついていないことが訳だという。しかし立派な檜風呂でしっかり温まったので、もうかった気分である。



下諏訪駅



道祖神にも御柱



春宮横をとおりる
砥川



私を歓迎する看板？



諏訪七不思議の大石
だとのこと



今井茶屋本陣跡
明治天皇も休息

塩尻峠の頂上 →

峠から見る諏訪湖、うっすらと富士山



塩尻に向かって下る



東山あたりの街並み



国指定重文の小野家住宅（塩尻）



阿禮神社（式内）・塩尻



国指定重文の堀内家住宅



雪がふるなかただ歩く

泊まった訳ありの部屋（塩尻、中村ホテル）



14. 2024年11月29日(金)雨のち曇り

出発地	洗馬駅	距離	19.4km	旅行速度	4.3km/時
目的地	奈良井鎮神社	時間	4時間30分	歩行速度	5.1km/時

8:30 洗馬駅出発(標高773m)

10:10-20 片平橋近くで休憩

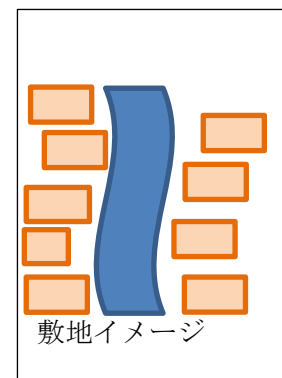
10:50-11:05 贄川駅にて休憩、ついでに用も足した(標高876m)

12:00-12:10 物見坂で休憩

12:40-12:45 奈良井駅到着(標高934m)

13:00 奈良井宿の端にある鎮神社到着

昨日とは異なり、雪もふらない曇り空で、快調に洗馬駅を出発した。いよいよ今回の最後の旅になる。ところがしばらく行って、本山宿に差し掛かると霧雨模様になり、風も前日と同様に南から強く吹き付けてきた。ホテルの朝のテレビでは、地元の天気はずっと晴れとなっていて安心していただけだったが、現実とは全く異なっていた。どうも木曾谷は関係ない天気になるようで、いわゆる山の天気になっているのだろう。上を見上げると、半熟卵のような太陽がぼんやりといて、遠くに少し青空なども見えたりしているのだが、次第に雨はひどくなる。昨日は風雪、今日は風雨で、それに負けずとすっかり宮沢賢治の世界になってしまった。どうしようもないので、やけくそに歩き続ける。すると「是より南木曾路」という碑が出て来る。両側から山がせまり、木曾谷なのだ。底に奈良井川が流れ、横に国道19号、中央線がほぼ並んで走っているところを、旧中山道が所々からまりながら共に南に向かっていく。谷底三兄弟といったところ。木曾路はすべて山のなか、とは藤村の名文だが、本当にそういう感じがする。しばらく行くと、贄川宿になる。JRの贄川駅でしばし雨から逃れ、タバコを一服。次第に標高も上がっていき、旧平沢村に至ると950mくらいになる。ここは、一大漆工の村であった。両側を漆器店が軒を並べている。木曾漆器である。素晴らしい街並みで、伝建地区(伝統的建造物群保存地区、国指定)となっており、これまで歩いてきた中仙道随一かもしれない。しかも、敷地割が道路に対して段々となっている。このような敷地割りがかつて、滋賀県の長浜で見たことがある。秀吉が朝倉勢が攻めて来た時に、街道の建物の段差によるくぼみに兵を配置し敵を狙撃しようとしてこのような段々の街並みとした。ここが同じ理由とは思えないが、どうしてこうなっているのか分からない。ここから奈良井宿は2kmほどすぐで、まず奈良井駅が出て来る。そこから奈良井宿が始まっており、江戸時代からあまり変わっていないのではと思われる街並みが始まる。同じく伝建地区に指定されているが、平沢よりより徹底的に伝統的な建築物になっており、現代の建物が全くなく、本当にビックリするような街並みが延々と1kmも続いていた。しかし平沢に比べると安普請の建築のようで、宿場と漆器の経済力の違いか、どういう理由によるのだろうか。奈良井の建物は旅館、飲食店、お土産店、漆器店などに活用され、観光客も多い。見ると半分以上はインバウンドの外国人のようである。またいつのまにか雨が上がり、時々日差しもあるようになっていた。ただ1時20分頃の電車を逃すと次は午後4時近い電車になってしまうので、残念ながらあまりゆっくと滞在はできなかった。かくして中山道歩きはひと段落ついたが、もう少し遅い時期であつたら、難しかったかもしれない。





旧旅籠川口屋（本山宿）



本山宿の街並み



是より南木曾の碑



19号線から時々このような山道に入る



贄川駅



贄川の関所跡



深澤家
(重文)





物見坂から旧平沢村を望む



漆工の町、平沢の街並み



段々となる敷地割



奈良井駅

奈良井宿

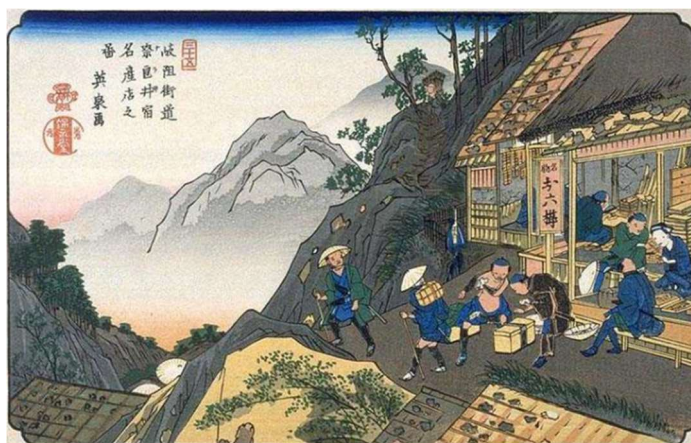




奈良井宿の街並み



奈良井総鎮守の鎮神社
1618年に香取神宮より勧請



英泉による奈良井宿
谷底の奈良井宿が山の中腹になっており
取材もしないで書いていたことがわかる

